

第五十六回卒業式

卒業式 式辞

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。そして皆さんを様々な面において、これまで支えてこられたご家族をはじめご関係の皆様にも、心からお祝い申し上げます。

このおめでたい席を借りまして、わたくしからご列席の皆様にもうひとつ喜ばしいご報告をさせていただきますと思います。

喜ばしいご報告とは、平成二十年度入試に関するものなのですが、今年度入試において、受験者数が一五四一九名という武蔵大学始まって以来の数を記録しました。これは昨年の受験者数八三一七名の約八五パーセント増という驚くべき増加率となっています。

おそらく皆さんは武蔵大学にいったい何が起こったのだろうか、かくの如き受験者増の原因は何であるのか、といった疑問を持つのではないのでしょうか。

この疑問に対する答えを述べる前に、卒業生の皆さんにわたくしの方からひとつ質問をします。昨年とその以前とで武蔵大学におい

て何か大きく変わった点がありますか。大方の人は「ない」と答えるでしょう。わたくしもそう思います。では何故急に受験者数が増えたのでしょうか。

その答えをお話しする前に、暫し目を今の日本の社会に転じてみようではありませんか。食品の偽装問題や年金問題など、様々な問題が起こっていますが、これらの問題はすべて「言葉」に対する軽視から来ているのではないか、とわたくしは考えます。賞味期限や消費期限を偽って表示したり、年金問題では不可能な約束を公言し、表示された「言葉」を平気で偽ったり、公言した「言葉」を平然と無視したりしているのです。「言葉」とは、本来非常に重く、深いものなのです。例えば、旧約聖書は次のようなくだりで始まっています。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があった。

ここで言われているように言葉には物を創り出す力が秘められているのです。日本においても古くから言葉には「魂」が宿っていると言われ、その神秘的な力を「言霊」と呼んでいました。このように洋の東西を問わず「言葉」は、軽視されるべきものではなかったはずなのです。西洋の詩人がこの世と同等のものを言葉によって生み出そうと試み、詩集を書き上げました。その中の何篇かが風俗壊乱の咎により削除を命じられた際、詩人は彼の創造した世界が崩壊してしまうと考えました。そして何年か後に新しい詩篇を付け加えることにより新しい世界としての詩集を再版しました。

今の日本の社会ではどうでしょうか。食品の賞味期限や消費期限の改竄はおろか、政治の命ともいえるマニフェストを軽視する政治家の姿にはただただ呆れるばかりです。

さて、話を元に戻すことにしましょう。何故武蔵大学の受験生が今年度増えたかですが、これは先ほどお話した「言葉」の軽視とどこかで繋がっていると考えられます。武蔵大学の教育は、「ゼミの武蔵」を中心に、創設以来変わりはありません。今年度変わったことといえば、そうした地道な教育に適切な「言葉」を与え、受験生に強くアピールしたことといえるでしょう。武蔵大学の少人数でアッ

トホームな雰囲気を、今年度の大学案内 『武蔵マガジン二〇〇八』
では、触れて温かい都市型大学」という言葉で表現しました。また、
建学の三理想」を敷衍した形で 知と実践の融合」という新しい
教育目標を掲げ、教育におけるその具体化を図りました。 デジタル
協働学基礎」然り、 学部横断課題解決型プロジェクト」然り、とい
った具合です。

このように教育の目標を明確な 言葉」で表現し、その目標に向
かって具体的な教育方法を模索し、さらにその方法を実行に移す、
いわば 言葉」から新しい現実を生み出していく、これが評価され
たのではないでしょうか。

ところで、入試で倦んだ頭を癒そうと、モンテーニユの 『エッセー』
のページを読み返してみました。ちなみにミシェル・ド・モンテー
ニユとは、現実の人間を洞察し人間の生き方を探求し続けた十六世
紀ルネサンス期のフランスを代表する哲学者です。 『エッセー』の第二
六章 子供の教育について」の中に次のような文がありましたので、
社会に旅立つ皆さんへの餞の言葉として、引用したいと思います。

暗記することは知ることではありません。それは記憶に預かっ

たものをしまっておくだけです。正しく知っていることならば、お手本を見なくとも、書物に目を向けなくとも、自由自在に使いこなすことができます。書物から一步も出ない知識は実にあわれむべき知識です。モンテーニュ著、原二郎訳『エッセー』岩波文庫より)

これこそまさに武蔵大学の新しい教育目標である「知と実践の融合」に他なりません。書物は知識の源です。そしてもちろん書物は「言葉」の集積です。したがって「言葉」は知です。その「言葉」は行動を伴ってはじめて真の「言葉」となるのです。そうした意味で、先に引用した『武蔵マガジン二〇〇八』の中で、ある卒業生がゼミの学びが、自分の言葉で語ることの大切さを教えてくれた、と語っていることの意味は深いのです。「知と実践の融合」とは、そうした「言葉」の持つ重みを知ることであり、自分の言葉で語ることででき、その「言葉」に信念を持つことなのです。

また、モンテーニュの『エッセー』のなかに、次のような文章もあります。

立派な家柄の子弟が学問を修めるのは、金儲けのためでもなければ、外面の利益のためでもなく、むしろ自分自身のために、自分を豊かにして内面を飾り、物識りの人間ではなく、立派な人間になるためであります。(同右)

本日ご卒業を迎えた皆さんも、武蔵大学で学んだ学問をモニターニュのいう「立派な人間になる」ために役立ててください。それが「建学の三理想」の支柱となっている。自ら調べ自ら考える力を養うこと」の真の意味であり、目的だとわたくしは信じています。

これから社会に出て、皆さんの真価が問われることになるでしょう。それは同時に武蔵大学の教育の真価が問われていることなのです。皆さんが社会で活躍することが武蔵大学に栄光をもたらすことなのです。皆さん、「言葉」を軽視せず、「言葉」に信念を持つ立派な人間になってください。平成二十年度入試の受験生の急増は、武蔵大学の教育の真価が高く評価された証なのです。そうしたすばらしい教育を皆さんは受けて来られたのです。そして見事、今日指定の単位を修得し卒業を迎えることができたのです。したがって、自信を持ってください。武蔵大学の卒業生としての矜持を忘れずに、

胸を張ってこれからの人生を歩んでいってください。

経済学部四二一名、人文学部二七四名、社会学部二二六名、計九二一名の一人ひとりの皆さん、本日は、本当にご卒業おめでとうございませう。皆さんの門出を祝し、これからのご活躍を心から祈願し、わたくしの式辞とさせていただきます。

平成二十年三月二二日

武蔵大学学長 平林 和幸